東京大学哲学研究室『論集』36号（2017年度）
pp.95-108

ドゥンス・スコトゥスにおける個別者認識の可能性

本間　裕之

１．はじめに

ドゥンス・スコトゥスは彼の『オルディナティオ』第二巻第三区分第一部において、個体化の原理について集中的に論じている。とくに第二問「質料的実体は、措定的で内在的なあるものによってそれ自身で個別者であるか」という問題の冒頭で、個体化の問題を以下のように整理している。

> この主題についての諸々の問いの意味は次のことにある。すなわち、この石の内にある何が、「近接的な基礎として」のそれによって、それのいかなるものもそれ自身であるところの多くのものへと分割されることが、それに相反するところのものであるのか、ということである。その分割とは、普遍的全体に固有な、それに下属する諸部分への分割のようなものである（*Ord.* II, d. 3, p. 1, q. 2, n. 48）[1]。

この整理に基づけば、『オルディナティオ』における個体化の原理の探求において問われているのは、「それによって、分割されることがあるものに相反するところのもの」とは何か、ということである。ただしここでいう分割とは、「普遍的全体に固有な、それに下属する諸部分への分割」である。これはつまり、類を種へ、種を個別者へ、というような分割であり、このような分割によって個別者がさらに分割されることはないということである。つまり、スコトゥスによれば、彼の個体化の探求において問題になっている個別者は、類や種が受け入れるところの「下属する諸部分への分割」を受け入れないようなものとして特徴付けられる。それでは、種に下属する個別者とは何であるか。また、下属する諸部分への分割とは何か。以下の引用は、これらの問題に重要な示唆を与えている。

> 本質の特質のもとで劃然と類を考察することで、類における最高のものが見出だされるように、中間の類、種、種差が見出だされる。さらに、そこでは最下位のもの、すなわち単一なものが、現実的な現実存在が全きしかたで除

かれつつ見出だされる。このことは明証的に明らかである。というのも、「この人間」は、「人間」と同様、現実的な現実存在を形相的に含んでいることはないからである（*Ord.* II, d. 3, p. 1, q. 3, n. 63）[2]。

ここでスコトゥスは、「この人間」（すなわち個別者的なもの）が、「人間」（すなわち種的なもの）と同様に現実存在を形相的に含んでいるということはない、と語っている。ところでスコトゥスは、知性の内に存在するということと、現実に存在することとを対にして、〈人間〉などの概念は、普遍として知性の内に存在するものである、と理解している（*Ord.* II, d. 3, p. 1, q. 1, nn. 33-4）。したがって、ここでの記述によれば、種に下属する部分であると言われる個別者は、少なくとも実在するものではない、ということが得られる。その上で類－種－個別者という範疇の体系における連続性を見るならば、類および種が概念として、論理学的なものである限り（*Ord.* II, d. 3, p. 1, q. 1, nn. 33–34）[3]、個別者も、それらと同様に論理学的な概念として位置付けられ得ることになるだろう。

この「種に下属する個別者は概念としての個別者である」という解釈を擁護するために、以下の二点を確認せねばならない。第一に、知性的な作用によって形成される概念ないし志向がいかにして個別者に関わるのか、ということである。そこで第二節では、個別者についての認識と個別者の概念がスコトゥスによってどのように説明されているのかを確認する。このことによって、論理学的領域に属する、概念としての「個別者」が確保される。第二に、いかにしてその概念としての個別者が種に下属すると言われるのか、ということが問題となる。このことは第三節において、彼の第二志向についての学説に基づいて説明される。これら二点を確認し、まず、種に下属すると言われる個別者が、論理学的領域において概念として存しているということを確保し、「下属する諸部分への分割」ということの積極的な内実を明確化する。それによって、これまでの研究では、形而上学的領域ばかりが強調され、実在の観点からのみ考察されてきたスコトゥスの個体化論において、論理学的領域が考察の範囲に含まれていることを明らかにすることが本稿の目的である。

２．個別者に関する認識

まずこの節では、そもそも「個別者の概念」が可能であるのかどうかを問題にする。中世において一般に受容されていた「感覚は個別的なものに、知性は普遍

的なものに関わる」という認識論の図式のもとでは「個別者の概念」は受け入れがたい。実際、スコトゥスも、個体化の原理についての問題の内で、異論として、個別者の認識不可能性を唱えるこうした立場を想定している[4]。だが、この立場に対してスコトゥスは「『単一なもの』は、それ自身の側による限り、自体的に可知的であることを認めよう（*Ord.* II, d. 3, p. 1, q. 6, n. 191）[5]」と解答していることからも明らかな通り[6]、彼にとって個別者は、知性によって知られ得ないようなものでは決してなかったのである。ただし、自体的に可知的であることと、私たちにとって可知的であることは区別せねばならない。実際スコトゥスは、原則として、私たちの知性が個別者を個別者として知解することはできない、と考えている（*Ord.* II, d. 3, p. 1, q. 6, n. 191）[7]。もし個別者を個別者として認識可能であるとすると、それを個別者の固有な特質のもとで認識していることになり、その限りで、個別者から一切の性質が取り去られたとしても、依然としてその個別者を他のものから区別することが可能である、というあまりに直観からかけ離れた事態が生じることになってしまう[8]。しかし、スコトゥスは、この世の人間知性が何らかのしかたで個別者を認識し、その概念を形成するための道を確保していた[9]。そこでまず、『デ・アニマ問題集』を用いて、知性が個別者を認識する過程、および、そうして認識されたものについてのスコトゥスの見解を見ることで、いかにして個別者の概念が可能であったのか、ということを明らかにする。

スコトゥスの体系によれば、可感的形象であれ可知的形象であれ、個別者は何らかの形象によって表象され、知性はそれを通じて個別者を知解する。そして形象が個別者を表象するに際し、三つの段階がある。順を追って説明しよう。

まず第一に形象によって表象されるのは、漠然とした個別者（individuum vagum）と呼ばれるものである。この状態では、知性は何らかの単一なものを知解してはいるのだが、しかしながらその単一なものがいかなる種に属するものかが分からない。この状態では、私たちは「何かがある」という認識にとどまっており、その何性は捉えられていない。その次の段階では、形象は絶対的な本性を表象する。つまり、単一性を含まないしかたで、その事物の何性が表象される。この段階に至って、第一段階では未規定的だった漠然とした個別者の何性が判明する。ここで例えば「遠くに人間がいる」と言うことができる。そして第三の段階では、指定された個別者が表象される。ただし、個別者がその当の個別者として、つまり「ソクラテスがソクラテスとして」表象されるのではなく、あくまでも記述（descriptio）によって表象されるのである。つまり、第二段階までで得られた「遠

くにいる人間」を、「いま、ここで、然々の形、大きさ、色、等々のもの」という諸々の状況（circumstantia）が特定化し、そのことによって指定された個別者が表象される。このようにして、諸々の状況によって特定化された本性を表象する形象を通じて、私たちの知性は個別者を認識することができるのである[10]。

整理しよう。個別者は、漠然とした基体における本性が、諸々の状況、あるいはさらに言えば、諸々の附帯性によって特定化されることによって認識される[11]。例えば「ソクラテスは白く、しわがあり、背が高く、口ごもって話す、云々、という一人の人間である（*QQ. de an.*, q. 22, n. 35）[12]」というようにである。

人間知性の個別者についての認識は以上のようにして進行する、ということが見て取られた。それでは、個別者の概念はいかにして可能であるのか。

スコトゥスによれば個別者の概念は単純なものではなく、むしろ複合的なものである。というのも、本性から取られた普遍的な概念に、その本性を特定していた多くの諸状況の概念が加えられ、それらの複合によって個別者の概念が形成されているからである[13]。先の例で言えば、「ソクラテス」の概念は、「人間」という普遍的な概念に、「白い」や「しわがある」等々の諸状況の概念が加わることによって得られる。このようにして、スコトゥスにおける「個別者の概念」の可能性が確保されているのである[14]。

スコトゥスによれば、私たちは、例えば、アダムを知性的に捉えるのでなければ、「アダムがある」ということを知らないことになってしまう。それゆえ、アダムがあることを知っている限りで、何らかのしかたでアダムの概念を有しているのでなければならない。ただし、その概念は、先にも述べられた通り、アダムの「アダム性」を表現するように、アダムを固有な特質のもとで捉える概念ではなく、アダムを個別者という側面から捉える概念、すなわち、アダムを「単一な人間」というしかたで捉える概念である。この概念について、スコトゥスは次のように述べている。

> それゆえ本性は、それら［諸々の附帯性］によって規定されたものとして知解される。それは、〈存在者〉のように端的に単純な概念ではなく、〈人間〉のように単純な何性的概念でもない。むしろ、実際には附帯的ではないとしても、〈白い人間〉の如くに、いわば附帯的でしかない概念である。そしてそれは、この生における私たちが到達する、より規定された概念である（*QQ. Metaph.* VII, q. 15, n. 32）[15]。

天使などの上位の知性のように[16]、個別的事象性を直接捉えることで、ソクラテスをまさにソクラテスとして認識し、その固有な特質のもとで認識するということは、この世の人間知性には不可能である。だが、すでに見たように、ソクラテスに関して一切の認識が成立せず、また一切の概念が形成されない、ということはない。ソクラテスは、諸々の附帯性によって特定化された本性として知性によって認識され、そのことによって、人間知性はある種の複合的な概念を形成するのである。このようにしてこの世の人間知性は個別者の概念を獲得することができるのである。そのような概念は、すでに述べられた通り、厳密な意味での抽象によって得られた概念からは異なっている。続く第三節では、この概念が種に下属し、さらには範疇の体系全体の最下位に位置付けられるのか、ということを、第二志向に基づき、述定という観点から説明を試みよう。

３．論理学的分析

続いて第三節では、第二節で得られた個別者の概念が種に下属し、さらには範疇の体系全体の最下位に位置付けられるということを、「第二志向」および「述定」という二つの道具を用いて説明しよう。

まず、スコトゥスによる類、種、種差の定義を確認しておこう。彼は『イサゴーゲー問題集』の内で、ポルピュリオスの提示しているそれらについての定義が適切なものであるかどうかを議論し[17]、最終的にはそれらの定義を正しいものとして受け入れている。つまりスコトゥスにとって類は「種において異なる多くのものものに、〈何〉において述定されるもの[18]」であり、種は「数において相違する多くのものものに（何であるかということにおいて）述定されるもの[19]」であり、種差は「それによって種が類からはみ出すもの（*QQ. Isagoge*, q. 25）[20]」であり、かつ「種において相異する多くのものものに、〈どのような〉において述定されるもの（*QQ. Isagoge*, q. 27）[21]」であると定義される。種差に関して説明を補うと、実在的複合（compositio realis）と呼ばれる質料と形相との複合と同様に、類と種差との複合は観念的複合（compositio rationis）と呼ばれ、種差は、質料として可能態的に振る舞う類に対し、形相として現実態的に振る舞い[22]、類を規定することで種を作るものである。こうして、「類は種に何において述定される」や「種差は種に

どのようなにおいて述定される」や「種は単一なものに何において述定される」という図式が得られるのである。

ところで、スコトゥスは単一性に関して以下のような区別を行っている。

> 対象ないし対象の部分として捉えられる単一性と、劃然と、捉えることの型（modus）ないし、そのもとで対象が捉えられるところの型であるところの単一性とは別々のものである。例。私が「普遍的なもの」と言う場合、捉えられる対象は複数であるが、捉えることの型、すなわちそのもとで［その対象が］捉えられるところの型は単数である。そのようにして、論理学的な志向において、私が「単一のもの」と言う場合、捉えられるものは単一性であるが、そのもとで［対象が］捉えられるところの型は普遍性である（*Ord.* I, d. 2, p. 1, q. 3, n. 183）[23]。

単一性は、対象の部分である場合と、そのもとで対象が捉えられる型である場合とで区別される。「対象ないし対象の部分である単一性」とは、第一志向、すなわち事物を表示する概念（*Ord.* I, d. 3, p. 3, q. 2, nn. 486-503）として捉えられ、他方で「そのもとで対象が捉えられるところの型としての単一性」は、例えば「ソクラテスは単一なものである」というしかたで、ソクラテスが単一性という型のもとで捉えられる場合に、その単一性は普遍的なものであり、論理学的志向、すなわち第二志向として理解される。つまり、この区別のもとで考えれば、単に「個別者」と言っても、それは実在するソクラテスを表示する〈単一なもの〉という第一志向か、あるいは、その〈単一なもの〉という概念を表示する第二志向か、という差異がある。

この区別を理解するために、Pini の研究[24]に依拠し、スコトゥスの第二志向の理解を簡単に整理しよう。スコトゥスは第二志向を以下のように定義している。

> 第二志向はすべて、観念的関係である。だが、任意の観念的関係がそうであるのではなく、むしろ、複合分割する、あるいは少なくとも、一方を他方へと関連付ける知性の働きの終端に属する観念的関係がそうなのである（*Ord.* I, d. 23, q. un, n. 10）[25]。

ここから明らかな通り、スコトゥスは第二志向を知性の第二の作用であるところの、概念の複合分割に関わる観念的関係として見て取っている。概念の複合分

割とは、知性の第一の作用である単純把捉によって得られた単純な概念、すなわち第一志向から命題を作り出す作用のことである。つまり、スコトゥスが「第二志向であるところのその対照は、対照する知性においてあるものとしての対象に関してのみある（*QQ. Metaph.* VII, q. 18, n. 42）[26]」と語っている通り、第二志向であるところの観念的関係は、知性の内にある対象、すなわち第一志向としての概念間に敷かれる関係である。Pini の説明によれば、知性が自ら自身へと立ち返り、知性の第一の作用によって、概念として知解された事物を考察し、そして知性がそれらの概念の間に対照を成り立たしめる、という知性による第一志向の概念について考察の二つのステップによって、知性は二つの概念を対照し、観念的関係である第二志向を原因し、それを概念として知解するのである[27]。

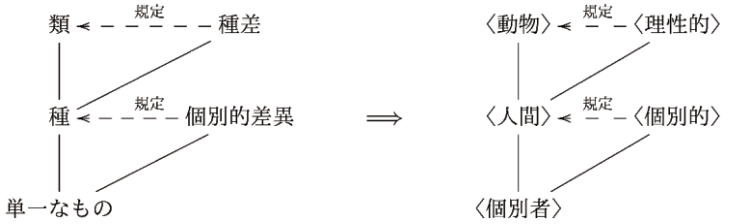
人間を例にとり、この一連のプロセスを見よう。まず、私たちが、例えばソクラテスを認識することで、〈人間〉や〈動物〉や〈理性的〉等々の第一志向の概念が得られる。これが知性の第一の作用である。ついで、知性がそのようにして得られた諸概念について考察し、それらの概念の間に対照を成り立たしめる。この働きは、上記の説明によれば知性の第二の作用と関係づけられるので、ここで例えば「人間は動物である」という命題が形成される。このように、命題が形成されることで、知性は、第一の作用によって得られた諸概念の間の関係を知解するに至るのである。つまり、こうして形成された〈人間〉と〈動物〉との間の関係をもとに、知性は、本節冒頭で述べられた類、種の定義に基づいて、〈人間〉に対する〈動物〉の関係を〈類〉という概念で捉え、〈動物〉に対する〈人間〉の関係を〈種〉という概念で捉えるのである。このようにして、知性は、その第一の作用によって得られた概念を考察し、それらの間に観念的関係を敷くことで、例えば〈類〉や〈種〉のような概念を得るのである[28]。

第二志向に関する以上の整理は類、種、種差に関してなされたものである。だが、本節の冒頭で引用したテクストが語っている通り、スコトゥスは類や種や種差のみならず、個別者のレベルでも第一志向と第二志向とを考えていたのである。それゆえ彼は、より明示的に次のように述べている。

> 単一なものの諸条件を表現する、〈単一なもの〉や〈基体〉云々という第二志向に属する何らかのものものがあるだけでなく、〈個別者〉や〈数において一なるもの〉や〈共通化不可能なもの〉といった、第一志向に属するもののものがある（*QQ. Metaph.* VII, q. 15, n. 32）[29]。

第二節ですでに、個別者の概念がいかにして獲得されるかを確認した。そうして獲得された概念は、事物を直接表示するものであるのだから、第一志向であり、上に引用されたテクストに基づけば、例えば〈個別者〉という概念である。そして〈個別者〉という概念には、〈単一なもの〉という第二志向が帰される。実在する人間であるソクラテスに関して、〈種〉という型のもとで〈人間〉という概念が受け取られるように[30]、〈単一なもの〉という型のもとで〈個別者〉という概念が受け取られる。「型」が第二志向であるのだから、この図式を Pini による整理に基づいて語り直すと以下のようになろう。第一志向である〈個別者〉がソクラテスを表示する概念であるならば、知性の第二の作用によって、知性が〈個別者〉という概念を考察することによって、「その個別者は人間である」という命題が形成される。そうして、〈個別者〉と〈人間〉との間に敷かれる観念的関係が知性によって知解されるのである。その関係の中で〈人間〉に対する〈個別者〉の関係が〈単一なもの〉として捉えられるのである。そして、「それによって種が類からはみ出すもの」であるところの種差のように、「それによって個別者が種からはみ出すもの」が何らか措定されねばならない。そうしたものは「個別的差異（differentia individualis）」として見出されるであろう[31]。

纏めよう。知性は、その第一の作用によって得られた第一志向を考察し、類、種、種差についての定義に基づいて、ある概念を別の概念に述定するという命題形成という第二の作用を通じて第二志向を獲得する。ある概念を別の概念に述定するという知性のこの作用は、第二志向である類、種、種差の間にある「類は種に何において述定される」や「種差は種にどのようなにおいて述定される」や「種は単一なものに何において述定される」という図式に沿って、第一の作用によって得られた断片的な諸概念の間にある種の構造を構築する。つまり、「人間は動物である」や「その個別者は人間である」などの述定関係をもとに、第二志向の間に定義された関係にしたがって、知性は第一志向の諸概念を秩序付ける。以上の考察を図に表すと以下のようになる。



この図について説明しよう。図の実線は述定関係を示し（例えば〈人間〉と〈理性的〉との間に引かれた実線は「人間は理性的である」という述定が可能であることを示している）、矢印付きの破線は、矢印の始点となる項が現実態的に振る舞い、可能態的に振る舞う矢印の終点となる項を規定する、という関係を示している（例えば〈理性的〉は、現実態的に振る舞い、〈動物〉を規定するということを示している）。知性は、その第一の作用に得られた〈人間〉や〈動物〉といった諸概念の間に、図の左側にある、第二志向の間にある関係に即して、命題形成の作用の中で図の右側にある図式で表現されるような関係を形成するのである。このようして人間知性はポルピュリオスの木を形成する、と整理することができる。この図式から、(1) 述定関係の特徴と (2) 規定–被規定関係の特徴という二つの特徴を取り出すことができるだろう。

1　より上位の概念（例えば〈動物〉）は、より下位の概念（例えば〈人間〉や〈個別者〉）に述定される。
2　同じ水準の諸概念（例えば〈動物〉と〈理性的〉、〈人間〉と〈個別的〉）は、その一方が他方を規定する。

ただし、これまでの考察によって得られる第一志向の諸概念の間に描かれる右の図式は、この世の人間知性によって得られるものであるということに注意せねばならない。すでに見たように、この世の人間知性にとって、〈個別者〉や〈個別的〉という概念は、厳密に言えば〈人間〉や〈動物〉や〈理性的〉と同じしかたで獲得される概念ではない。それゆえ、知性によって、述定関係と規定–被規定関係の特徴を通じて得られる構造は一様であり、同様の図式が描けるとしても、〈個別者〉や〈個別的〉などの概念と〈動物〉や〈理性的〉、〈人間〉などの概念との間には相異があることには留意せねばならない。

さて、得られた図式の述定関係の特徴に基づいて、「下属する諸部分への分割」が理解可能となる。つまり、下属する部分とは、それに全体が（何において）述

定されるような部分である[32]。たとえば、〈人間〉という下属する部分には、〈動物〉という全体が述定されるようにである。そして、本節での議論によれば、述定とは知性の第一の作用によって捉えられた第一志向の諸概念の間に成り立つものであることが確認された。つまり「種に下属する部分」とは、それに種が述定されるところの部分である。言い換えれば、知性の第二の作用によって獲得される命題において、述語である概念に〈種〉という第二志向が適用されるようなものの主語にあたるものである。このことから、「下属する部分へと分割されることに相反する」という個別者の特徴は、個別者は述語にならないことを、類や種などの第二志向のことばを用いて語り直したものであると言える[33]。ところで、述定関係があくまで概念間で成立するものである以上、「種に下属する」と言われる個別者は概念として理解されるものであって、実在する個別者と同一視することはできないのである。こうして本稿冒頭において述べられた「種に下属する個別者は概念としての個別者である」という解釈が正当なものであることが確保される。

４．結論

本稿では、スコトゥスが個体化の探求において、個別者を特徴づけるために用いている「下属する諸部分への分割」の積極的な内実を明らかにするために、個別者の認識可能性および個別者の概念の可能性を確保し、次いでスコトゥスの第二志向の学説に則り、述定という観点から、第一志向の諸概念の間に、ポルピュリオスの木を作る、というしかたで一定の秩序を導いていることを確認する、という二つの作業を行った。これら二つの作業を通じて、「下属する諸部分への分割」とは、全体が部分に述定されるようなしかたで概念を分割することであり、それに基づけば「下属する諸部分への分割を受け入れない」という個別者の特徴は、「決して述語にならない」ということの言い換えとして理解することができた。このように考えるならば、スコトゥスの個体化の議論において、概念や述定が問題になる論理学的領域が、彼の考察の一つの中心をなしており、論理学的領域を無視して彼の個体化論の全容を把握することはできない、ということが明らかとなった。スコトゥスの個体化論は、Wolter の言うように[34]、事物と概念、すなわち形而上学的領域と論理学的領域という二つの領域の対応関係を丁寧に探りながら問われなければならない。そしてこのように二つの領域の対応関係を考察することは、紙幅の都合上、詳細な考察は他の機会に譲らざるを得ないが、スコトゥ

スの重要な学説の一つであり、個体化の原理もまたそれによって説明されるところの「形相的区別」（distinctio formalis）について理解する上でも欠かすことのできないものである。

---

[1] “Est ergo intellectus quaestionum de hac materia, quid sit in hoc lapide, per quod ‘sicut per fundamentum proximum’ simpliciter repugnat ei dividi in plura quorum quodlibet sit ipsum, qualis ‘divisio’ est propria toti universali in suas partes subiectivas.”

[2] “sicut invenitur supremum in genere praecise considerando illud sub ratione essentiae, ita inveniuntur genera intermedia, et species et differentiae; invenitur etiam ibi infimum, scilicet singulare, omnino circumsripta existentia actuali, — quod patet evidenter, quia ‘hic homo’ non plus includit formaliter existentiam actualem quam ‘homo.’”

[3] スコトゥスによれば、類や種といった第二志向として取られる限りでの普遍的なものは論理学者の対象であった。この理解に倣い、本稿では、概念ないし志向の集合を「論理学的領域」と名付ける。Cf. Duns Scotus, *QQ. Isagoge*, Prooemium ad quaestiones de universali（OPh. I, p. 21）:「ある場合には、［普遍的なものは］形式として、すなわち、第二志向の事物として取られる。そしてそれは知性によって原因され、第一志向の諸事物に適用され得るものとして取られるのである。そしてその限りで、論理学者は固有なしかたで普遍的なものについて語る」（“Quandoque [universale] sumitur pro forma, scilicet pro re secundae intentionis, causata ab intellectu et applicabili rebus primae intentionis, et sic loquitur logicus proprie de universali”）。第二志向とは、例えば「類」や「種」などの概念を指す。これは「人間」などの第一志向に適用されるという意味で、「概念の概念」とも整理される。Cf. Giorgio Pini 2002.

[4] 例えば Duns Scotus, *Ord.* II, d. 3, p. 1, q. 6, nn. 144-6 (Vat. VII, pp. 464-5) を参照せよ。

[5] “concedo quod ‘singulare’ est per se intelligibile, quantum est ex parte sui.”

[6] ただし、『オルディナティオ』においては、nn. 145-6 の異論で提示される、個別者の定義や学知（scientia）に関してはそれを不可能であると考えている。ここでのスコトゥスの議論によれば、個別者は種の定義以外の定義によっては定義されず（n. 192)、さらにそこから、彼は個別者についての学知の不可能性を導いている（n. 193）。他方、『形而上学問題集』においては、個別者の自体的な定義可能性を認めている。Cf. Duns Scotus, *QQ. Metaph.* VII, q. 13, n. 158（OPh. IV, p. 271）:「それゆえ、私たちが個別者を定義できないのは、個別者の側によってではなく、私たちの無能力のゆえにである」（“Ergo non possumus individuum definire, non ex parte eius, sed ex inpotentia nostra”）。個別者が定義可能なものであるならば、さらには個別者に関する学知もが可能であることになろう。さらに、個別者の可知性についても踏み込んだ議論をしており、単一者の有している差異に関しても可知性を認め、また「ソクラテス性」のような、個別者に関わる本質を認めている。この点は『オルディナティオ』において否定されていた点であった。Cf. Duns Scotus, *QQ. Metaph.* VII, q. 13, n. 154（OPh. IV, p. 270）:「以上の見解より、単一なものが一なる「何」であることは明らかである。［…］そしてもし単一なものが一なる「何」であるならば、自体的に可知的であり、単一者の差異もまた同様である」（“Ex ista opinione patet quod singulare est unum quid.［…］Et si singulare est unum quid, est per se intelligibile, etiam differentia singularis”）。スコトゥスが個別者の本質について言及する際には、混乱を避けるためか、「何性（quiditas）」よりも「何（quid）」のほうが適切であると考えていたと思われる。Cf. Duns Scotus, *QQ. Metaph.* VII, q. 14, n. 12（OPh. IV, p. 284）。また、個別者の本質に関しては、King 2005 を参照。

[7] ただし、『形而上学問題集』において、魂とその働きについての認識は、対象が個別的なものであっても可能であると考えている。Cf. Duns Scotus, *QQ. Metaph.* VII, q. 13, n. 158（OPh. IV, p. 271）。

[8] Cf. Duns Scotus, *QQ. de an.* q. 22, nn. 26-7（OPh. V, p. 233-5）。これに関して、個別者をその当の個別者として認識が可能であるならば、「全く同じ場所にある、同じ姿をした二つの物体」や「刻々と変化する太陽光線のすべて」を相異するものとして区別することができる、という例がよく挙げられる。E.g. Duns Scotus, *Ord.* II, d. 3, p. 1, q. 1, n. 21（Vat. VII, p. 399-400）; *QQ. Metaph.* VII, q. 13, nn. 168-9 （OPh. IV, p. 275）。

[9] 人間知性が個別者から完全に排除されている、とする議論に対して、帰納推論の可能性と個別者への愛という二点から解答する。前者は、帰納とは単一なものものから普遍的なものへの進行であり、推論は知性的な作用であるのだから、帰納推論の出発点である個別者が知られねばならない、という議論である。また後者は、認識できないものを愛することはできず、ところで私たちは個別者を愛しているのだから、個別者を認識していなければならない、というものである。Cf. Duns Scotus, *QQ. de an.*, q. 22, nn. 20-2（OPh. V, pp. 232-3）。

[10] Cf. Duns Scotus, *QQ. de an.*, q. 22, nn. 34-7（OPh. V, pp. 236-8）。だが、このような認識が直観認識であるのか、あるいは抽象認識であるのかは判然としない。たとえば Cross は、この認識を抽象認識として理解している（Cross 2014, 74-5）が、King は、附帯性によって個別者を特定するような認識に関して主題的に語ってはいないが、人間知性による、ある個別者を（まさにその当の個別者として、ではなく）個別者として認識するという働きを直観認識に割り振っている（King 2015, 111-6.）。また、Pasnau のように、スコトゥスが、この世の人間知性による直観認識の可能性を認めている、ということに懐疑的な論者もいる（Pasnau 2003）。この問題は、ここで解決することが非常に困難であるため、ここでは立ち入らない。

[11] 状況（circumstantia）が附帯性と言い換えられる根拠に関して。Cf. Duns Scotus, *QQ. Metaph.* VII, q. 15, n. 32（Vat. IV, p. 306）:「［知性が］単一なものを、すなわち、これであるところの本性を、これであるかぎりでの本性として知解するのではなく、むしろ、これに固有な諸々の附帯性を伴う本性として知解するのだが、そのように全体として知解する際に、［知性は］基体を諸々の附帯性とともに構成するのである」（“Intelligendo tandem ut intelligat singulare, scilicet naturam quae est haec, non in quantum haec, sed cum accidentiis propriis huis, componit subiectum cum accidentibus”）。

[12] “‘Socrates est unus homo, crispus, longus, blaesus’ et huiusmodi.”

[13] Cf. Duns Scotus, *QQ. de an.* q. 22, n. 35（OPh. V, pp. 237-8）。

[14] ここで語られている「個別者の概念」は、すでに見た通り、知性による概念の複合によって得られているのだから、能動知性によって行われる抽象作用、すなわち知性の第一作用である単純把捉によって得られるものとして術語的に用いられる「概念」とは出自が異なっていることが指摘されうる。そして、それぞれの出自が異なる以上、個別者の概念と、抽象認識によって得られる概念とを同じ「概念」ということばで一括りにしてしまうことには問題があるように思われる。この問題に関しては、紙幅の都合上、詳細な議論を行うことはできないが、以下のようなしかたで解答の指針を与えることができるであろう。スコトゥスは「抽象」ということばを、狭義の抽象と広義の抽象という二通りに区別し、何性からの抽象を狭義の抽象として整理する一方で（Duns Scotus, *QQ. Metaph.* VII, q. 13, n. 166（OPh. IV, p. 274））、その広義の抽象によって、私たちは個別者の概念を得ると語っている（Duns Scotus, *QQ. Metaph.* VII, q. 13, n. 165（OPh. IV, pp. 273-274））。それら二つの抽象は確かに異なるものではあるが、そのいずれもが「主語の概念に述定される概念を対象から取り出す」という働きを有している、という点でスコトゥスは「抽象」という一つの名を与えていたと考えることができる（ただしスコトゥス自身は、なぜ広義の抽象に対しても「抽象」ということばを用いるか、ということに対する説明を施していないため、このことは「スコトゥスのテクストから読み取ることができる」という示唆に留まる。Tweedale もまた同様の解釈を採っていると思われる。Cf. Martin Tweedale 1999, vol. 2, 751）。こうして、私たちが何性から獲得する概念も、概念の複合によって獲得する個別者の概念も、意味の違いはあれど、「抽象」という同じ名前がスコトゥスによって与えられていることに鑑みれば、それら二つの概念に対して、同じ一つの「概念」という名を与えることにも一定の正当性が認められよう。

[15] “Natura igitur intelligitur determinata istis, et est conceptus non simpliciter simplex, ut ens, nec etiam simplex quiditativus, ut homo, sed tantum quasi per accidens, ut homo albus, licet non ita per accidens. Et iste est determinatior conceptus ad quem devenimus in vita ista.”

[16] Cf. Duns Scotus, *QQ. Metaph.* VII, q. 15, n. 28（OPh. IV, pp. 303-4）。

[17] Cf. Duns Scotus, *QQ. Isagoge*, qq. 14-5, 17-20; qq. 21-2; qq. 25-8。

[18] Cf. Duns Scotus, *QQ. Isagoge*, q. 14（OPh. I, p. 67）: “‘genus est quod praedicatur de pluribus’ etc.”; cf. Lorenzo Minio-Paluello 1966, 6-7: “adsignaverunt genus esse dicentes quod de pluribus et differentibus specie in eo quod quid sit praedicatur, ut ‘animal.’”

[19] Cf. Duns Scotus, *QQ. Isagoge*, q. 21（OPh. I, p. 131）: ""species est quod praedicatur de pluribus differentibus numero""; cf. Lorenzo Minio-Paluello p. 9: "Amplius autem sic quoque: 'species est quod ponitur sub genere et de qua genus in eo quod quid sit praedicatur.'"
[20] "differentia est qua abundat species a genere."
[21] "differentia praedicatur de pluribus differentibus specie in eo quod quale."
[22] Cf. Duns Scotus, *QQ. Isagoge*, q. 28, n. 5（OPh. I, p. 176）。
[23] "aliud est singularitatem esse conceptum vel ut obiectum vel ut partem obiecti, aliud singularitatem esse praecise modum concipiendi sive sub quo concipitur obiectum. Exemplum: cum dico 'universale', obiectum conceptum est pluralitas, sed modus concipiendi, id est modus sub quo concipitur, est singularitas; ita in intentionibus logicis cum dico 'singulare', quod concipitur singularitas, sed modus sub quod concipitur est universalitas."
[24] Giorgio Pini 2002.
[25] "omnis intentio secunda est relatio rationis, non quaecumque, sed pertinens ad extremum actus intellectus componentis et dividentis vel saltem conferentis unum ad alterum."
[26] "ista comparatio, quae est intentio secunda, non est nisi obiecti ut in intellectu comparante."
[27] Cf. Giorgio Pini 2002, 119-20.
[28] 種差に関しても同様の議論が可能である。
[29] "non tantum sunt aliqua secundae intentionis condiciones singularis exprimentia, ut 'singulare', 'suppositum' etc., sed etiam aliqua primae intentionis, ut 'individuum', 'unumnumero', 'incommunicabile' etc."
[30] Cf. Duns Scotus, *QQ. Isagoge*, q. 10, n. 26（OPh. I, p. 49）:「〈種〉は〈人間〉との関連では型として受け取られる」（"'species' respectu hominis accipitur ut modus"）。
[31] この概念は、スコトゥスの個体化論において登場する重要な概念であるが、これについて本稿で詳しく説明する余裕はない。スコトゥスが個別的差異を実際に「それによって個別者が種からはみ出すもの」として定義しているわけではない。だが、彼は個別的差異と種差とを連続的なしかたで見て取っていた（Cf. Duns Scotus, *QQ. Metaph.* VII, q. 13, n. 124 （OPh. IV, p. 261-2））。それゆえ、種差の定義に倣い、個別的差異を「それによって個別者が種からはみ出すもの」として理解することも正当化されるであろう。
[32] Cf. Duns Scotus, *Ord.* II, p. 1, q. 2, n. 48（Vat. VII, pp. 412-3）。述定関係は、種に類を述定するような「何における述定（praedicatio in quid）」と、種に種差を述定するような「どのようなにおける述定（praedicatio in quale）」とがある。Cf. Duns Scotus, *QQ. Isagoge* q. 12, n. 15（OPh. I, pp. 57-8）。それゆえ、厳密には述定関係だけでは下属する部分を理解することはできない。だが、全体ー部分関係が成り立つのは、種差ー種関係ではなく類ー種関係であろう。それゆえ下属する部分に関しては、とくに「何における」述定関係に限定して理解する。
[33] Cf. Duns Scotus, *QQ. Metaph.* VII, q. 13, n. 124（OPh. IV, p. 124）:「［この個別的差異は］あるものを述定可能なものの根拠において構成することの原理ではなく、むしろ単に主語となり得るものの根拠において、最大限の主語となり得ることによってこれであることの原理である」（"［Haec differentia individualis］ non est principium constituendi aliquid in ratione praedicabilis sed tantum subicibilis et hoc maxima subicibilitate"）。
[34] Wolter 2015, 54.

［凡例］

ドゥンス・スコトゥスの著作は以下から引用する。

Duns Scotus, Johannes. 1950-. *Doctor subtilis et Mariani Ioannis Duns Scoti opera omnia*, studio et cura commissionis scotisticae ad fidem codicum edita, praeside P.C. Balić, Roma, (Vat.).
———. 1997-2006 *Opera Philosophica,* 5 vols., Girard J. Etzkorn et al. (eds.), N.Y., The Fransiscan Institute of St. Bonaventure University, (OPh.).

また、引用に際しては以下の略号を用いる。

Ord.: *Ordinatio.*
QQ. Isagoge: *Quaestiones in librum Porphyrii Isagoge.*
QQ. Metaph.: *Quaestiones super libros Metaphysicorum Aristotelis.*
QQ. de an.: *Quaestiones super secundum et tertium de anima.*

［文献表］

Boulnois, Olivier. 2014. *Lire le Principe d'individuation de Duns Scot*, Vrin.
Cross, Richard . 2014. *Duns Scotus's Theory of Cognition*, Oxford University Press.
King, Peter. 2005. "Duns Scotus on Singular Essenc", *Medioevo*, 30, 111-37.
———. 2015. "Thinking About Things, Singular Thought in the Middle Ages", in *Intentionality, Cognition, and Mental Representation in Medieval Philosophy*, Gyula Klima (ed.), Fordham University Press, 104-21.
Minio-Paluello, Lorenzo. 1966. *Aristoteles Latinus I, 6-7*, Desclée de Brouwer.
Pasnau, Robert. 2003. "Cognition", *The Cambridge Companion to Duns Scotus*, Thomas Williams (ed.), Cambridge University Press, 285-311.
Pini, Giorgio. 2002. *Categories and Logic in Duns Scotus*, Brill.
Sondag, Gérard (trans.). 1992. *Le principe d'individuation*, Vrin.
Tweedale, Martin M. 1999. *Scotus vs. Ockham – A Medieval Dispute over Univesals,* 2vols, The Edwin Mellen Press.
Wolter, Allan B. 1962. "The Realism of Duns Scotus" in *The Philosophical Theology of John Duns Scotus,* Marilyn McCord Adams (ed.),Cornell University Press; rev. and enl., Franciscan Institute Publication, 2015.